

春の“ニッセイ国分の森”

東京大学名誉教授 鷲谷 いづみ

2016年の春、鹿児島県にある「ニッセイの森」の調査に同行させていただいた。

花と昆虫の関係などの生物間相互作用を主要な研究テーマの一つとしてきた私にとって、とくに興味深く思ったのは「国分の森」である。

国分の森は、鹿児島空港から車で1時間以内という、東京から比較的アクセスのよい場所にある。



ニッセイ国分の森

ニッセイの森は、国有林の皆伐地から大きく育った人工林までを含むランドスケープモザイクの一片をなしている。ニッセイの森の内部には、異なる植栽樹種の地割りを反映した小さな空間スケールにおけるモザイクがみられる。その入れ子状のモザイク構造は、それぞれのパッチが組み合わさることで、生息・生育場所の多様性をつくりだしている。

皆伐跡地に広葉樹等を植栽して造林するにあたっての「計画者の思い」が林相に秘められているニッセイの森は、土地の自然林にも一般的な人工林にも似ることのない独特の森の姿をみせている。国分の森の植栽樹種は、地割りごとに、ヤマザクラ、イロハモミジ、イチイガシ、ケヤキ、クスノキなどである。植林という人為によって意図的につくられた森であるという点で共通する点の多い人工林とは様相を大きく異にする。森の活用という点からみれば、季節ごとに森の植物がつくる景観を鑑賞する「樹林庭園」と表現してもよいかもしれない。



今、私たちが見る森の姿は、人為だけでなく、自然の営為が加わって成り立ったものである。植栽木に加え、伐採跡地に残されていた生物遺産（種子バンク、栄養体バンクなど）や周囲の樹林から風や鳥が運んだ種子から芽生えた植物も植生の重要な構成員となっているからである。ヒトの意図的な行為と自然の論理にもとづくプロセスがつくりあげたその独特の姿は興味深い。

春、私が調査に加わらせていただいた時期には、桜の花は終わっていたが、森のそこそこに春の徴を見つけることができた。小雨の中でとくにはっきりと見てとれたのは、照葉樹のタブノキやシロダモの赤みがかかった新葉と林床に咲くエビネ、キエビネ、キンランなどの花の黄色系の色彩である。明るい鮮やかな黄色の花を咲かせるキエビネは、「春の妖精の軽やかな舞い」と喩えたくなるような、たたずまいであった。キエビネとエビネの交雑によって生まれたのではないと思われる中間的な色彩の花もみられ、彩りの妙が見る者を楽しませてくれた。エビネが好きな人がこの季節この森に立ったとしたら、この上ない幸せな気持ちになれるのではないだろうか。



キエビネ



エビネ

森を散策すれば、全身が透き通るような白色の腐生植物のギンリョウソウ、可憐なクリーム色の花を下向きに咲かせるチゴユリのほか、タツナミソウ、マムシグサ、カテンソウなど、花も草姿も多様な草本植物が見られ、植物好きの人は、足もとから視線を外すことができないだろう。



キンラン



マムシグサ

植栽されてヤマザクラやイロハモミジが成長した落葉樹ゾーンのゆるやかな谷地形の林床は、一面がクサイチゴで覆われていた。ヤマザクラの花もイロハモミジの花も森の昆虫であるニホンミツバチの蜜源として人気がある。森には高木にも林床にもニホンミツバチの蜜源となる植物がたくさんある。ニホンミツバチが近くに生息しているとすれば、この森は重要な採餌の場の一つとなっているに違いない。さらに年月を経てこの森が成熟し、老齢木に樹洞ができるようになったとしたら、ニホンミツバチはそこに営巣し、食・住の両方をこの森に依存することになるだろう。



イロハモミジ



ヤマザクラ



ケヤキ



クスノキ

ミツバチよりもコマルハナバチやトラマルハナバチなどのマルハナバチの利用に適していると思われる花も森には少なくない。天気の良い早朝に森を歩けば、それらマルハナバチ類のにぎやかな羽音を聞き、下向きに咲く花にぶらさがる愛らしい姿を見ることができよう。森のマルハナバチはネズミの古巣などに営巣するので、今でも森の中に巣があるに違いない。

ハナバチ類と同様、花から餌をとりその受粉をたすけるチョウにとっても花の種類が多いこの森は魅力的な採餌の場といえるだろう。チョウの成虫がそのストローのような口で蜜を吸うことのできる形態の花も少なくない。一方で、チョウの幼虫は、特定の樹木や草本植物（食草・食樹）の葉のみを食べるスペシャリストである。森を彩るタブノキやシロダモの新葉を見ながら、そこにはきっとアオスジアゲハの幼虫が育っているに違いないと思った。また、イチイガシの新芽でルーミスジミの幼虫が育っていることも想像して期待感が高まった。

ルーミスシジミは、翅の表に広がるコバルトブルーが目立つ美しいシジミチョウである。食樹のイチイガシやウラジロガシが生育する照葉樹林の消失にともなって減少し、今ではごく限られた地域でしか見られない。国のレッドリストにも掲載されている絶滅危惧種である。イチイガシの植栽は、この絶滅危惧種のチョウの保全に寄与する可能性がある。それに限らず、食樹・



イチイガシ

食草や蜜源としての潜在的な可能性を持つ植物が豊かなこの森は多くの種類のチョウの生息を支えているに違いない。ルーミスシジミと同じようにイチイガシなどを食樹とするチョウであり、日本固有種で分布の限られているサツマミドリシジミもこの森で育っているかもしれない。

訪れたのが春だったため、森の多様な共生関係のうち、花と昆虫の関係に想いをめぐらせながら森を歩いたが、他の季節にも訪れて観察すれば、季節を通じて花が咲きつなぎ夏から秋にかけてさまざまな木の実・草の実が実るこの森には、動物が花や実を利用し授粉や種子分散を助ける共生関係がはりめぐらされていることがわかるにちがいない。β多様性の高い（＝生育・生息場所の多様性に富んだ）この森は、生物間の共生関係を観察して楽しむ森として、大きな活用のポテンシャルを秘めた森であるといえるだろう。

（写真は2016年4月にニッセイ緑の財団にて撮影）